

人間として考える歴史総合の授業

南澤 武蔵

「人間の歴史」としての歴史総合

歴史総合が施行され2年目となった。現行の学習指導要領における新設科目の歴史総合はコンテンツからコンピテンシーへの転換の象徴的な科目であるといえる。しかし、この科目が「歴史の学び方を学ぶ」科目であるゆえにいただく懸念もある。それは、史料／資料を用いて科学的に歴史を構築することがめざされるなかで、生徒が史料／資料の操作と、それを用いた合理的・科学的な思考や叙述ができさえすればよいととらえてしまはないかという点である。史料／資料を使って論理的に説明できさえすれば、歴史の解釈として「正しい」となってしまうと、歴史修正主義を許容することにもつながる。

また、歴史に関する史料／資料をもとにした大局的な歴史の検討に終始すると、血肉の通った人間の歩みや生きた世界としての歴史が理解されなくなるのではないだろうか。生徒が学ぶ歴史は「人間の歴史」であるはずが、論拠としての数値やグラフでしか語られなくなれば「人間の歴史」から離れてしまう。われわれは同時代においても文化的な差異をもちつつ、人間としての感情など、国や地域、時代に左右されない普遍的な要素も持ち合わせている。その人間としての普遍性に依拠すれば、生徒が「人間の歴史」を考えていくことは十分に可能なはずである。

感情的な側面からの実践や議論は1980年代の安井俊夫の「共感」論から近年の「歴史的エンパシー」に至るまで展開されている①。「感情」を用いる際

の難点は、感情によってかたよった判断がされることであり、合理的・科学的な歴史ではなくなる点にある。その点に関して、ともに「共感」と訳されるシンパシー sympathyとエンパシー empathyは、前者が自己と他者を同一視するものであるのに対し、後者は自他を区別し、他者の行為の意味や人々の感情を理解しようとする。歴史的エンパシーはその時代の文脈や価値観を史料／資料などから批判的に明らかにし、当時の人々の感情を理解しようとすることになるため、合理性や科学性が担保される。

上記を理解したうえでなお、本稿の筆者はもう少し「人間」という側面から、より直接的な生徒の感情や人間の普遍性から歴史的な思考がなされる機会があってもよいと考えている。そこで、本稿では歴史の授業における人間の普遍的な心理や生徒の感情を用いた学びの授業実践とその試みについて検討していく。

授業実践の概要

現行の「歴史総合」の学習指導要領において、「人間」などの熟語も含めた「人」について記載した箇所は6カ所ある。その1つが第二次世界大戦期に関する記述で、「第二次世界大戦の性格と惨禍、第二次世界大戦下の社会状況や人々の生活、日本に対する占領政策と国際情勢との関係などを多面的・多角的に考察し、表現すること」（下線筆者）と記されている②。

2022年度の歴史総合の授業において、第二次世界大戦に関する内容で4回の授業と課題レポート

で単元構成をした実践に取り組んだ(表1)。本校では山川出版社の『歴史総合 近代から現代へ』(歴総707)を教科書として使用しており、授業実践に該当する内容は第Ⅱ部第6章の「2 ファシズムの台頭」と「5 第二次世界大戦と太平洋戦争」とにまたがって記述されている。

課題レポートのテーマは「満たされない」が生み出す狂気の世界 The World of Madness Caused by “unfulfillment”とした^④。レポートの文字数は2,000字以上とし、盛り込む内容をStep 1～5として設定した。そのうちのStep 1～4を授業内で扱い、学んだことや考えたことを自分なりにまとめていくことでレポートが書き進められるかたちとした。最後にStep 5として、自分のレポートをほかの人に読んでもらい、他者からのコメントを付記することを求めた。

授業における工夫

授業の展開において意識したことは、生徒にとって“リアル”ではない第二次世界大戦下の社会状況や人々の生活を、生徒がどのようにして自分たちのこととして感じ、考えられるようにするかである。“リアル”に感じさせるという点で、Step

2～4においては人間の心理作用がわかるような教材を扱い、生徒が感情を動かせるような仕掛けを意識的に用意した。

Step 2で使用した映画『THE WAVE』(2008年、ドイツ)は1967年にカリフォルニアの高校のカリキュラムでおこなわれた、「ナチスの独裁政治を繰り返さないため、実際に独裁政治をおこなってみる」という実験によっておこされた実際の事件をモデルに制作された映画である。大衆心理、人間の心の動きがナチスの独裁体制の出現を理解させることをねらいとした。映画は場面を選んで40分ほど視聴し、独裁体制下における人々の変化、全体主義的な雰囲気の醸成を生徒が感じる機会とした。

Step 3ではアンネ・フランク・ハウス編(光明久恵訳)『アンネ・フランク・ハウス——ものがたりのあるミュージアム』(文藝春秋、1999年)から父オットーによる言葉も含めて9つの記述(A～I)を選び、時期を隠して用意した。たとえば、以下のような記述である(年号は隠して空欄とした)。

D. 隠れ家はいまや興奮のるつぼです。いよいよまだにあまりにすばらしく、あまりにお

表1 単元構成(各Step)

第1時(Step 1) ドイツでナチスが躍進した要因は何か。

[内容]ファシズム勢力の台頭からドイツにおけるナチスによる政権獲得と対内・対外政策について、講義を中心として理解する。

第2時(Step 2) 人々はなぜナチズムを受け入れたのか。

[内容]映画の視聴を通して、独裁制とその体制下での人々の変化について考える。

第3時(Step 3) ホロコーストのなかでアンネは何を感じていたのか。

[内容]ナチスによるユダヤ人排斥運動からホロコーストへの流れ、そして『アンネの日記』を通してホロコースト下のユダヤ人への理解を深め、ホロコーストが起きた原因を検討する。

第4時(Step 4) 第二次世界大戦下を生きた子どもたちは戦争をどのように感じていたか。

[内容]多様な立場で戦時下を過ごした子どもたちに関する資料の読解を通し、自分たちと同年代の若者が戦時下をどのように生きたのかを考える。

授業外(Step 5) レポートに対するコメントをもらう。

[内容]「テーマ」についてレポートから理解したことを、読んだ人からコメントとしてもらう。

とき話然として、とてもほんとうに今年、()年じゅうに、勝利がやってくると考えていいのでしょうか？ まだわかりませんが、それでも希望は生きつづけ、新たな勇気と力とをわたしたちに与えてくれます。ひょっとするとマルゴーの言うように、うまくゆけばわたしも、9月か10月にはまた学校へ行けるようになるかもしれません。

I. ()年5月からは、いよいよ急な坂をころげおちるように、事態は悪いほうへ向かいました。まず戦争、それから降伏、つづいてドイツ軍の進駐。わたしたちユダヤ人にとって、いよいよほんとうに苦難の時代が始まったのは、このときからです。

そして、アンネを中心にアンネ一家がどのようにホロコーストのなかで過ごしていったのかを、資料の9つの記述が書かれた時期を状況や心境の変化をもとに検討しながら、生徒がグループで考える課題を出した(図1)。課題の目的としては、

記述をよく読みながら、ホロコースト下における同年代の1人のユダヤ人の体験や思いに生徒が向き合う時間とすることにあった。そのうえで、ホロコーストがおこった原因として「ヒトラー」「ナチスの指導部や官僚機構」「ドイツの民衆」の3つを提示した。生徒はアンネに関する資料を読んだ経験もふまえ、最大の原因が3つのうちの何であったかを考察した。

Step4ではサラ・ウォリス、スヴェトラナ・パーマー編著(亀山郁夫ほか訳)『私たちが子どもだったころ、世界は戦争だった』(文藝春秋、2010年)を資料として利用した。ドイツやソ連、ポーランド、フランス、イギリスなど、様々な国の多様な立場の子どもたちが残した第二次世界大戦下での記録である。戦争初期から晩期にかけてのドイツの子ども、ナチス占領下のフランスの少女やレニングラードの包囲網下に苦しむソ連の子どもなど、生徒と同年代の子どもたちが体験し、感じたことを資料とした。ユダヤ人だけではなく戦火のなかで子どもたちがどのように過ごしていたか、資料の読解を通して理解をうながした。

レポートからみる生徒の学び

それでは、生徒は歴史の当事者たちにどのような感情をいだき、そして歴史的に思考していったのか。生徒のレポートの記述からみていく(誤字は一部訂正、下線筆者：波線部はStepの内容を通して感じたこと、直線部は考察した内容)。

生徒のレポートの記述例①(Step2)

この映画を観て感じたことは、個人個人の力は微々たるものでも、一つにまとまった集団の力はどんどん大きくなるということ、また、人々の心の弱さが集団をより強力なものにすることだ。……このことから考えられるのは、ヒトラーに強大な権力を与えたのは、ヒトラー自身の狂気だけではなく、彼を支持した大衆でもあるということだ。強力な指

2022年度4年歴史総合アリン：特別版(No.45の補足)

アンネと『アンネの日記』から見るユダヤ人のホロコースト

問.『アンネの日記』や関連する史料に記されている□を、□の中にそれぞれ入れなさい。

1933年	9月 アンネの一家はドイツからオランダへと移住する。	□
1938年	11月 『水晶の夜(クリスタル・ナハト)』でユダヤ人やユダヤ人商店、シナゴーク(ユダヤ教会)が襲撃され、多数の死傷者を出した他、3万人近くのユダヤ人が強制収容所に入れられる。	
1939年	9月 ドイツ軍がポーランドへと侵攻し、第二次世界大戦が始まる。 →ポーランドではユダヤ人をゲットーへと強制移住させる。	□
1940年	5月 オランダ・ベルギーに侵攻 6月 ドイツ軍がパリを占領する。	□
1941年	6月 ドイツ軍が独ソ不可侵条約を破り、ソ連へと侵攻する。 12月 ドイツはガス室を利用したユダヤ人の殺戮を本格的に開始する。	□
1942年	5月 アウシュヴィッツ強制収容所でのガス殺が開始される。 7月 アンネの一家は隠れ家へと移る。	□
1943年	2月 ドイツ軍はスターリングラードの戦いでソ連に降伏する。	□
1944年	6月 連合軍がノルマンディー上陸作戦を開始する。 8月4日 アンネの一家及び隠れ家の住民はドイツ秘密警察(SD)によって捕まる。	□
1945年	3月下旬 アンネはベルゲン・ベルゼン強制収容所でデブスにかかって病死する(享年15歳)。	□

図1 資料の記述の時期を書き入れるワークシート

導者はそれを支持する大衆がいるから成り立っている。大衆を構成している私たちにも責任があると自覚し、自分たちの心の弱さを利用されないように、常に理性的に周りで起こっていることを観察することが必要だと思った。

生徒のレポートの記述例②(Step3)

アンネはホロコーストに対して絶望していたのだと思う。ヒトラーが就任し、本格的なユダヤ人排斥運動が始まったこと、家を捨てて隠れ家に移らなくてはならなくなったこと。アンネはそういった世の中の体制に人々が染まっていることが恐ろしかったのではないか。しかしナチスによるユダヤ人弾圧政策の波が生活を侵していても、アンネは希望を持ち続けた。……こうした何の罪もない人達が命を奪われていったのは、悲しいことだと思う。しかし、責任は政府のみになるのではなく、ヒトラーのような指導者を選出してしまった民衆にもあると考える。

記述例①は、生徒が映画を通して大衆心理のあり方について理解し、ナチス体制下のドイツの人々が決して特殊なのではなく、自分たちにも同様のことが起こることについて考察をしている。当時のドイツの人だけが狂気ともとれる体制を生んだのではなく、人々がどのように心を動かし、社会を動かしていったのかを人間の心理面から検討したうえで、ナチス時代のドイツ社会について考えている。また、そのことをふまえて、現代の自分たちもわからない人間であるとする観点から戒めを述べるに至っている。

記述例②はアンネの日記の記述を読みながら同情し、自分の読後感を織り交ぜながら、ホロコーストの原因について考えたことを述べている。科学的な根拠のない個人的な感情かもしれないが、その心の動きが生徒の思考をうながし、ホロコーストの原因に対する自分の考察へと結びついている。単にホロコーストの3つの要因を比較検討するよりも、より自分たちに関係あることとして考

察をしていた。

記述例①・②ともに、生徒が考えを深めていった様子がみられた。人間の普遍性に加え、人間としての自分の感情が生徒に考える際の視点として作用したと考える。

今年度の実践への展望

昨年度の反省としては、Step 4の授業実践において、生徒の感情面からの考察を進められなかった点がある。授業に用いた資料は多様な国や立場の子どもたちの記録であるにもかかわらず、それぞれの子どもたちのおかれた状況や戦況による記述の違いを活用することができなかった。立場の違いを利用して多面的・多角的に考察することができると考えていたが、コロナの影響によって授業の機会が失われ、資料を配布して生徒が読むだけになってしまうなど、十分に活用ができたとはいえなかった。

今年度は、資料のなかに出てくる子どもの1人の立場に生徒がなり、他国や異なる戦況下の人と意見交換をするロールプレイなどに取り組んでいく予定である。その時代の当事者の立場に一度立つという時間が、「人間の思い」を生徒が受け止める時間となり、より深く考察する契機になると考えている。

① 田尻信壹「安井俊夫の歴史授業論に関する研究——「スパルタクスの反乱」実践を事例として」(『目白大学高等教育研究』第26巻、2020年、p.69～79)。

② 内容の大項目「C 国際秩序の変化や大衆化と私たち」の「(3) 経済危機と第二次世界大戦」のイの(イ)。

③ 留学生が学年にいたため、英語でのレポートも受け付けた。
(みなみさわ・むさし／)

東京大学教育学部附属中等教育学校教諭)